

支援で得た知識や 手法を活かして

グループホーム黒崎

北九州ヘルスケアサービス株式会社
認知症対応型共同生活介護

北九州市八幡西区東王子町7-8
入居18名 平成19年4月に開設。
多職種が連携した24時間の医療・介護体制を整え
看取りを含めた安心・安全な支援を行っている。

応募の動機

職員は限られた人数で利用者支援にあたる一方、記録をはじめ間接業務に多くの時間を
要している状況でした。また、業務改善のための機器について情報収集をしていたもの
の、自分たちだけでは限界がありました。専門家の力を借りて、業務の効率化や負担軽減
をはかり、「うまれた時間」を入居者様との関わりや、職員のスキルアップに活かそうと考
え、応募しました。



管理者
塩田さん

本部 課長
楠瀬さん

取組の内容と現場の変化

取組内容	記録	見守り(夜間)	準備/片付け
問題・課題	記録によって他の業務が滞り、 残業になる	夜間にセンサーコールが多く、そ の対応に追われる	準備・片付けに時間が取られる
取組	①記録物の棚卸を行い、記録内容と 記録や帳票の必要性を精査した ②記録システム導入に向け情報収集 やメーカーによるデモを実施	①センサー(複数)と利用者ごとの発 報条件を見直した ②①を踏まえ、センサーの入れ替え を検討しメーカーによるデモを実施	①動線や作業効率を考慮した保 管場所の変更や物品の選定 ②リネン交換専門のパート職員 や、シルバー人材の雇用
効果	①記録業務の負担30%減 記録時間の削減(スタッフ1人あた り)日中:5分減 夜間:13分減 ②記録システム導入の準備が進んだ	①センサーの取捨選択と、設定の最 適化ができた 夜間コール回数 約48→27回/日 ②新たなセンサーの選定を進めた	非専門職業業務の負担40%減

全員参加で進めた業務改善

当初は取組に抵抗感を示す職員もいました
が、業務量調査で問題が可視化されたこと
や、記録の負担軽減という最初の成果を発
端に、意識が変わりました。経営層と現場
が一緒に参加して、意思決定が迅速だった
ことも大きかったと思います。毎月の会議
で業務改善が議題に上るようになり、職員
が意見を言う機会が増えました。

わかりやすい情報提供が導入を後押し

専門の相談員が、現場の実情をふまえてメ
ーカの説明をわかりやすく解説してく
れたことで、効率的に情報収集できまし
た。他施設の事例や機器について知るこ
とができ、外部の専門機関を活用する意
義を実感しました。相談員から得た情報
をもとに、転倒防止のための車椅子用セ
ンサーも導入しています。

今後の展望

取組後も、支援で得た知識や手法を活かしています。今回学んだグループワークを実
践し「みんなが笑顔でいられる職場」という理想像を職員間で共有できました。職員が
思いを表現すること自体に、価値があると感じており、現在は「自分たちの家族を入
居させたい」と思える施設にできるよう、既存機器の活用と新たな機器導入の年間ア
クションプランも策定し、業務改善に取り組んでいます。

